

清水幾太郎における原風景 - 時間・空間・物語 -

大久保孝治

この小論は、「清水幾太郎と彼らの時代」と題する現在構想中の清水の評伝の最初の部分に相当する。清水の著作活動は東京帝国大学在学中に始まるが、本論では、その後の長期にわたる、そしていくつかの変異点を有する清水の行動と思索の軌跡を追っていく上で重要と思われる、少年時代の清水の経験のいくつかを検証する。

1. 時間

清水幾太郎は一九〇七年（明治四〇年）七月九日の生まれである。このことに清水は二つの「小さな誇り」をもっていた。一つは「七月九日」の生まれであることに対して。

私は七月九日の生れ。子どもの頃は、四万六千日に生れた、といふのが、私の小さな誇りであつた。併し、今は、四万六千日といつても、老人でなければ判つてくれない。

（1）

『世界』一九五一年九月号に掲載された「ふるさとの人々」という文章の一節である。しかし、現在では四万六千日（「しまんろくせんにち」と読む）の意味を知っている老人も少ないであろう。四万六千日とは、観音様をこの日にお参りすると四万六千回日参したのと同じだけの功德を得られるという江戸時代からの言い伝えである。そうした特別の功德日というものは月に一回、年間十二回あるのだが、功德の程度には差があり（たとえば一月一日は百日相当）、七月十日は最大の功德日なのである。ちょうど初詣に出かける人たちが一番乗りを目指して大晦日の夜から繰り出すように、四万六千日にも前日の七月九日から相当の人出があり、いつしか九日・十日の両日を四万六千日と呼ぶようになってほしい。下町の夏の風物詩として知られる浅草寺のほおづき市が七月九日・十日に開かれるのは、このことに由来する。

もう一つの「小さな誇り」は、「一九〇七年」の生まれであることに対して。『現代思想』下巻（一九六六年）に付けられた「文献解題」の中で、清水は次のように述べている。

誰にでも他人には判らぬ小さな誇りがあるように、いつからか、二十世紀の初めの十年間に生まれたというのが、私の小さな誇りになった。いつからか、と言うよりは、二十世紀初頭の西洋が、同時に多くの領域で開始された天才たちの精神的冒険によって飾られていることを知ってから、と言うべきであろう。それらの冒険と何の関係もない東洋の涯に生まれながら、私は、この時期を私のものと考えようになった。そして、これらの冒険によって象徴される二十世紀の全体を私のものと考えようになった。(2)

敗戦後、清水が大河内一男らと立ち上げた在野の教育・研究機関を「二十世紀研究所」と名付けたのには、こうした「小さな誇り」が働いていたのかもしれない。

清水が『現代思想』で試みたことは、十九世紀風の大思想の崩壊過程として二十世紀の思想をスケッチすることであった。十九世紀の終わりから二十世紀の初めにかけて企てられたさまざまな精神の冒険(ニーチェの哲学、プランクの量子仮説、フロイトの精神分析、ベルンシュタインの社会主義論・・・)の中から、清水が冒頭で取り上げたのは一枚の絵画であった。

一九〇七年、ピカソは「アヴィニヨンの娘たち」という奇妙な絵を描いた。この作品は多くの画集に収められているから、大部分の読者は知っているであろう。義理にも美しいと言えぬ五人の女性を描いた絵が非常に有名になっているのは、ほぼ二つの理由によるようである。第一に、それがキュビズムの最初の重要な作品であるということ、第二に、それがアフリカの黒人芸術から強い影響を受けているということ。この絵には、客体を幾何学的図形に分解し、この図形の総合として客体を新しく構成して行こうという合理性の追求と、異国的なものの中に豊かな生命を探ろうとするエネルギーの追求とが見られる。...(中略)...ピカソの作品に見られる二つの傾向が、或る時は結合し、或るときは分裂しながら、一方では西ヨーロッパの芸術の古い伝統を無残に破戒し、他方では、二十世紀の芸術の大きな流れを形作って来たことが重要であるように思われる。いや、芸術の世界を越えて、それが二十世紀の思想そのものの運動を予告したことが大切であるように思う。(3)

文章の長短にかかわらず、書き出しをどうするかは常に悩ましい問題である。「アヴィニ

ヨンの娘たち」の話を冒頭にもってくるというアイデアを思いついたとき、清水は「よし、これで行こう！」と小さく声に出して言ったのではなからうか。二十世紀の最初の十年間に生まれたことを「小さな誇り」と感じていた清水にとって、『現代思想』を自分の生年である一九〇七年に描かれた絵画の話から始めることは、気の利いたアイデアであったに違いない。そして、これはもちろん清水自身は意識していなかったであろうが、ピカソが生涯を通じてさまざまな作風を示した「変貌の画家」であったことも、『現代思想』が清水自身の思索の遍歴の検証作業でもあるという点から考えると、意味のある符号の一致と言えるのではなからうか。

しかし、四万六千日に生まれたことと違い、二十世紀の初めの十年間に生まれたことの「小さな誇り」は、清水の子ども時代からのものではない。そもそも清水が西暦というものの存在を知ったのは、ようやく小学校を卒業する頃のことである。

日本橋から本所へ引っ越した大正八年は、一九一九年に当る。現在の少年の場合は全く違うであろうが、私は、この年に、キリスト紀元というものがあることを初めて知った。(4)

大正八年の引っ越しについては後で触れるが、当時の新聞を見てみると、現在の新聞のように発行年月日の表記は西暦・元号の併記にはなっておらず、元号のみである。少なくとも一般の日本人、すなわち庶民は一九〇七年を「二十世紀初頭」としては意識していなかったはずである。

かといって、無論、「明治末期」という意識もなかった。なぜなら明治が四十五年で終わることを明治四十年の人々は知らなかったからである。明治天皇（もちろんこれは追号で、在位中は「天皇」、「陛下」、「天子」と呼ばれていた）はわずか十六歳で即位したため、明治四十年の時点でまだ五十代の半ばであった。明治三十七年に糖尿病と診断され、明治三十九年には慢性腎臓炎を併発していたが、その事実は公表されていなかったし、本人にさえ知らされていなかった。明治天皇が尿毒症のために亡くなったのは明治四十五年七月三十日だが、天皇は七月十日の東京帝国大学卒業式に行幸し、十五日の枢密院会議にも出席している。天皇が倒れたのは十九日。翌日、宮内庁は天皇が病気であることを発表した。天皇の死はそれからわずか十日後のことである。明治天皇の死は急逝と呼ぶべきものであった。明治という時代は、ある日、突然に、終わったのである。

「二十世紀初頭」でも「明治末期」でもないとする、一体、当時の人々の時代認識を表す適切な言葉は何であったろうか。それは「戦後」である。「戦前」があくまでも回想的な時代認識であるのに対して、「戦後」は同時代的な時代認識である。普段、われわれが「戦後」という言葉を何の限定もないしに使うとき、それは一九四五年八月十五日以後の六十年以上に及ぶ(そして幸いにして現在も続いている)長い時代を指す。その途中、一九五六年の『経済白書』は「もはや戦後ではない」と宣言し、その言葉は大いに流行したけれども、「戦後」という言葉の使用に終止符を打つことはできなかった。その後も、「オイルショック」(一九七三年)や「バブル崩壊」(一九九一年)といったひとつの時代の終わりを象徴する出来事はあったが、いずれも「戦後」の中の里程碑たるにとどまった。しかし、近代日本の歴史をふり返るに、そこには複数の「戦後」が存在する。内戦である戊辰戦争はひとまずおくとして、「第一の戦後」は日清戦争後であり、「第二の戦後」は日露戦争後である。一九〇七年はこの「第二の戦後」の渦中にあつた。

一九〇七年の西洋の絵画を代表する作品がピカソの「アヴィニヨンの娘たち」であるとするれば、同じ年の日本の絵画(洋画)を代表する作品は和田三造の「南風」であろう。筏に乗って大島沖を漂流する男達の姿を雄々しく描いて、日露戦後の高揚した時代の気分を見事に表現したこの作品は、明治四十年十月二十五日から十一月三十日まで上野で開催された第一回文部省美術展覧会(文展)で洋画部門の二等(一等作品はなかったので、事実上の最高賞)を受賞した。現在、「南風」は地下鉄東西線の竹橋駅を上がってすぐ、北の丸公園の一角にある、東京国立近代美術館に常設展示されている。群青の海、白い波頭、晴れ渡った空。漂流中とはとても思えない、きりりと引き締まった男達の肉体と表情。カラリとした明るさと、清々しい風と、不屈の精神に溢れた絵である。彼らに乗せた筏は、大島に背を向けて、はるかな水平線を目指しているように見える。

しかし、「南風」から伝わってくる高揚した気分は、「第二の戦後」の時代精神のあくまでも一つの側面であることを忘れてはならない。日露戦争の勝利に人々は歓喜したけれども、失ったものは大きく(靖国神社に祀られている日露戦争の戦没者は約九万人)、得たものは小さかった(一九〇五年九月三十日、日露講和条約がポーツマスで調印されたその日、条約の内容を不満とする群集によって、近代日本が経験した最初の都市騒乱、日比谷焼き討ち事件が起こった)。膨張を続ける軍事費は国家の財政を圧迫し、一九〇七年一月二十一日の東京株式市場の暴落に端を発した戦後恐慌は人々の暮らしを直撃した。悲しみと、怒りと、苦しきは、「第二の戦後」の時代精神のもう一つの側面である。こうした「第二の戦後」の時

代精神の二面的性格は、第一次世界大戦（それは庶民にとって日清・日露の戦争と比べると実感に乏しい戦争であったが）を通過することでさらに増幅し（たとえば対華二十一ヶ条要求と米騒動）大正時代全体を覆っている。

2．空間

清水の生地は、墨田川にかかる両国橋の西側のたもと、東京市日本橋区薬研堀（現在の東京都中央区東日本橋二丁目）である。薬研（やげん）とは漢方で薬種を細かく砕くのに用いる舟形の器具のことで、内側の窪みに薬種を入れ、軸のついた円盤で押し砕く。われわれの日常生活ではまず見かけないが、時代劇の中で使われる小道具として見覚えのある方は多いのではなかろうか。その薬研の形（V字型）に掘られた入江があったことから薬研堀と呼ばれたわけだが、堀自体は清水が生まれる四年前に埋め立てられ、姿を消していた。薬研堀は七味唐辛子の発祥の地で、「薬研堀」は七味唐辛子の代名詞ともなっている。

清水の父、末吉（すえよし）は一八八三年の生まれで、薬研堀で竹屋（竹材専門の材木問屋）を営んでいた。江戸時代、江戸には火事が多かったこともあって、材木業は繁昌していた。初代広重の『名所江戸百景』『京橋竹がし』には竹の林立する置き場や川面に浮かぶ竹の筏が描かれている。山本松谷の『新撰東京名所図会』（一九〇一）にも「竹河岸」というタイトルで竹の林立する置き場で働く職人たちの姿が生き生きと描かれている。しかし、清水が子どもの頃には、竹屋という商売は完全に一種の絶滅危機種になっていた。建築材としての用途はもうほとんどなく、紡績会社が製品の包装用に孟宗の竹片を必要としていた程度であった。「竹屋は日本橋区にただ一軒しかない」と、父は機会あるごとに言っていたという。そこには珍しい商売をしていることの誇りが感じられるが、客観的に見れば、竹屋が時代に取り残された商売であるという証言にほかならなかった。

竹屋を始めたのは父の父、清水の祖父であった。祖父は一八三四年の生まれで、維新までは旗本であった。禄を離れた祖父は、しばらく本所永倉町の屋敷で無為徒食の日々を送っていたが、明治十年頃、維新のときに貰った八百円（の残金）を元手に薬研堀で竹屋を始めたのである。清水幾太郎は空間的には東京の下町の生まれで、それ故、「江戸っ子」とか「下町っ子」と呼ばれることも多かったが、階層的には一般庶民の子どもではなく、没落した士族の子どもであった。彼は生まれたときに十五代将軍徳川慶喜の来たという産着を着せられ、老人たちが「世が世なら、あの子だって…」と自分のことを話しているのを襖越しに聞いて

育った。講談本などに「徳川」と敬称なしで出ていると、わざわざ鉛筆で「様」という字を書き加えたという。

正直のところ、私は、徳川家を倒し、慶喜公を苛めた皇室を憎いものを感じ続けて参りました。まして、徳川家を裏切つて皇室を助けた田舎侍に至つては、軽蔑にだけ値するもののように感じて来ました。勿論、長ずるに従い、私も、徳川家を倒したから皇室は憎いというような簡単な気持ちは薄らいで来ましたし、天皇崇拜の学校教育が漸く私を圧倒したということもあるでしょう。しかし、それでも、天皇や皇室に対する真正直な崇拜や尊敬の気持ちは、私にとって終に縁のないものでした。(5)

二冊目の自伝『私の心の遍歴』の出版は一九五六年であるが、右に引用した部分の初出は『婦人公論』一九五四年一月号である。それから約二十年後、『諸君!』一九七三年三月号に清水は天皇制の擁護を旨とする「天皇論」を発表するのだが、それは「天皇や皇室に対する真正直な崇敬や尊敬の気持ち」がその二十年間に清水の中に新たに生まれたからだろうか。おそらく、そうではなくて、戦後も一貫して国民の間に広く見られる天皇制支持の傾向(世論調査データ)を踏まえつつ、プラグマティックな立場から、天皇が日本近現代史の中で果たしてきた統合機能を再評価したためであろう。

清水の一家は没落の過程の中にあつた。しかもその過程はまだ底を打ってはいなかった。清水が尋常小学校の六年生のとき、一家は時代遅れの竹屋という商売に見切りをつけ、洋品雑貨の商売を始めるのだが、それに伴って本所区柳島横川町へ転居をしている。清水は生涯に十三回もの転居(すべて都内の移動)を経験しているが、これが最初の転居である。三冊目の自伝『わが人生の断片』からそのときの様子を引く。

月も日も覚えていないが、大正八年の或る日、家財道具を積んだ馬車の後について、両国橋を西から東へ渡って行った。父にとっても、私にとっても、これは最初の引越であつた。単なる引越でなく、落ちて行くような引越であつた。橋の途中で、妹は、「いつ日本橋に帰るの」と私に聞いたが、私は聞こえない振りをしていた。近頃は、「下町」という言葉が見境もなく用いられているが、当時の古い小さな東京では、本所でも、回向院や旧吉良邸辺りまでの、隅田川に近い地帯は、下町と呼ばれたかも知れないが、東へ進むにつれて、「場末」になる。柳島横川町は、力と富とを求めて、というよりも、

生きる道を求めて東京へ流れ込んだ人たちの住んでいる地帯である。公害という言葉のない時代であったが、一日中、空気が臭かった。江戸時代からの言葉や趣味や人情を探す方が馬鹿で、そこに住む人々は、各地の方言や風習を無遠慮に持ち込んでいた。(6)

「月も日もおぼえていないが」とあるが、二冊目の自伝『私の心の遍歴』には「大正八年六月」のことだったと書かれている(7)。梅雨入り前の、あるいは梅雨の晴れ間を待っての引っ越しだったのだろう。

両国橋は、隅田川に架かる二番目の大橋(最初は千住大橋)として、一六六一年に作られた。江戸幕府は防衛上の見地から隅田川に架橋することに消極的であったが、一六五七年の大火で十万人の死傷者が出たことを契機に、防災上の見地から、それまでの方針を改めたのである。その後、何度か架け替えがなされ、清水の生まれる三年前、一九〇四年に木橋から鉄橋に生まれ変わった。現在の両国橋は一九一二年に完成したもので、一九〇四年の鉄橋は現在よりも二十メートルほど下流にあった。両国橋という名称はそれが武蔵と下総という二つの国の間に架かることに由来するもので、現在では、橋の東側だけに両国という地名が残っているが、清水が子どもの頃は、東側を東両国、西側を西両国と呼んでいた。

一般に、「橋」は二つの異質な世界を繋ぐもののメタファーである。部落差別を主題とした住井すゑの小説のタイトルは『橋のない川』であった。橋のないことは絶望的だが、橋が架かっていることも人生の喜怒哀楽の原因となる。将棋の十四世名人木村義雄の自伝の書き出しは次のようなものである。「十二歳の少年が、父に連れられて、両国橋を渡った」(8)。木村は一九〇五年の生まれ。清水よりも二歳年長である。生まれた場所は本所。父は下駄屋を営んでいた。木村が父に連れられて両国橋を渡ったのは柳橋から浅草橋へ向かう通りの角の網船屋の二階に住んでいた井上義雄八段のところへ入門を申し出るためであった。結局、木村は井上八段ではなく関根八段(後に十三世名人)の通い弟子になるのだが、「両国橋を渡った」ことは木村の立身出世物語の冒頭にもってくるに相応しいエピソードだったのである。清水が両国橋を木村とは反対方向の「西から東へ」渡ったのは、このエピソードから三年後のことであった。

清水の一家が両国橋を西から東へ渡る前年に出版された山口孤剣『東都新繁昌記』という本がある。東京への流入人口の増大を背景として明治の終わり頃から東京案内本の類がブームになったが、そうした中の一冊で、「お役所の麹町」「書生の神田」といった具合に東京市の地域(区)ごとにその特徴を論じるという構成になっている。その見出しを借用するなら、

清水の一家は「和製の日本橋」から「職工の本所」へ引っ越したのである。「京橋は日本橋や、神田と同じく近年殆んど戸数が一定して、著しき相違がないのに、本所、深川、浅草、巢鴨、渋谷は大速力で戸数の増加して行くのは、思ふに人間が中央から四つ隅にはみ出さんとするものであつて、其処に悲しき痛ましき生活問題が横たわつてゐる。単に大東京の膨張などと太平楽に看過するべきものではない。(9)」山口孤剣は社会主義者で、清水が生まれた一九〇七年に平民新聞に「父母を蹴れ」という記事を書いて逮捕・投獄され、翌年六月に出所した。その出所歓迎会が神田錦輝館で開かれたときに「無政府 共産」の赤旗が掲げられて警官が介入したのが有名な赤旗事件である。この事件で、山口は、大杉栄や堺利彦や荒畑寒村とともに逮捕されるのだが、逮捕されたおかげで、入獄中に起こった大逆事件とは関わりをもたずにすんだ。大逆事件後の社会主義の「冬の時代」を山口は雑誌記者や新聞記者をしながら糊口をしのいでいたのだが、一九一五年十二月から一九一七年二月まで大隈重信主宰の雑誌『新日本』に連載していた記事を本にしたのがこの『東都新繁昌記』である。そこには社会主義者のまなざし、生活問題 = 社会問題を発見しようとするまなざしが遍在している。山口孤剣は『東都新繁昌記』が出た翌年、『改造』一九一九年十月号に「日本社会主義運動史」を寄稿し、「社会党の冬は去って春は来た」と書いたが、それから一年後、腎臓病のため三十七歳で亡くなった。

社会問題の発生は、一方で、それを実践的に解決しようとする社会主義の台頭と、他方でそれを実証的に研究しようとする社会学の台頭とつながっている。やがて東大社会学研究室の主任として清水の前に現れることになる戸田貞三は、清水の一家が両国橋を渡ったのと同じ年に、東大の助手を辞して、創設されたばかりの財団法人大原社会問題研究所の所員となり、半年ばかり、日本の社会事業の記録蒐集・編集の仕事にあっている。

清水は本所という社会問題のるつぼのような土地に引っ越して、やがてその場所から、無政府主義やマルクス主義に染まりながら、東大社会学研究室につながる学問的立身出世の階段を昇っていくことになる。実践的であることと実証的であること、ジャーナリスティックであることとアカデミックであること、体制外(在野)であることと体制内(講壇)であること、清水の社会学への志向には当初からこうしたアンビバレンツなものが含まれていた。

3 . 立身出世の物語

清水の二冊目の自伝『私の心の遍歴』の冒頭近くに、小学生の彼が自宅の前の「リン」と

呼ばれる竹を立てかけておく場所に登る場面が出てくる。

私が子供であつたせいか、リンは非常に高いものに思われました。小学校へ入つてからは、時々、このリンの天辺まで登つてみました。或る高さまでは、ギイギイとしなう長い梯子で登れるのですが、それ以上は、リンに縋つて登らねばなりません。天辺まで登ると、何でも見えます。そして、何という明るさでしょう。正面の小学校の高い建物は目障りで困りますが、少し方向を変えると、平常は仰ぎ見るような建物が、一つ残らず、私の眼下にあります。銀行も会社も大商店もお屋敷も、すべて私の眼下にあります。無数の家々の屋根を越えて、直ぐ目の前に、日本橋の三越が見えます。私は、幾度か、このリンへ登つて、快哉を叫びました。黙つていようとしても、明るい叫び声が腹の底から出て来てしまうのです。何でも見えるのです。何も彼も明るいのです。(10)

ここに表現されている心情は、近代版「人生の物語」の典型である立身出世(成功)の物語に特徴的なものである。前近代社会が社会移動(階層間の移動)を抑制する社会であったのに対して、近代社会はそれを認め、むしろ奨励する社会である。「大きくなったら何になる?」という大人が子どもに当たり前のようにする質問は、職業選択の自由を前提としている点で近代社会に固有のものである。この質問をシャワーのように浴びて育つことによって、近代社会の子どもは人生を何者かになる過程として認識し、社会移動の欲求を学習する。一八六八年(慶応四年)三月に発表された新政府の基本方針「五箇条の誓文」には次のような一条が含まれていた。「官武一途庶民二至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」。国民すべてが各々の「志」の実現に向けて不断の努力を続けるような国家、それが新政府の思い描く近代国家日本のイメージであった。個々人の人生における努力と成功がそのまま国家の繁栄(富国強兵)につながると考えられたのである。

新しい「人生の物語」が普及するためには、その物語と適合的な社会制度が必要とされる。一八七二年八月、国民皆学を目指して、フランスの学校制度をモデルとした近代教育制度法令「学制」が公布されたが、そのとき本文に添えられた「学制序文」には「学問八身ヲ立テルノ財本」であると書かれていた。「財本」とは「資本」の意味である。日本の急速な近代化の原因は、模倣すべき西洋列強諸国の存在にあったことはいうまでもないが、もう一つ忘れてならないのは、本来の意味での「資本」をもたない下層の出身者でも学校というルートを辿って上昇的な社会移動を遂げられるシステムが早い時期から完備されたことである。

私が危ういリンの上に登つたも、今にして思えば、当時の私を包んでいた重苦しい環境からの脱出という意味があつたのでしょ。そう考えねば、ひとりリンの上に立つた時の、腹の底から湧き上がるような喜びというものは理解できません。私は、無意識の裡に、現状から脱出することを欲していたのです。しかし、脱出の本格的な道となりますと、それは、リンに登ることより、本を読むことによつて開かれたと言わねばなりません。(11)

清水の最初の自伝『私の読書と人生』は、そのタイトルが示しているように、自身の半生を読書遍歴というスタイルで綴つたもので、「知識」を「財本」とする立身出世物語の知識人版と呼ぶに相応しいものである。その中に読書のための特別な空間として登場するのが図書館である。東京市立の図書館第一号は、清水が生まれた翌年、一九〇八年竣工の日比谷図書館。これを皮切りに、各区に一館を目標に次々に市立図書館が作られていったが、その多くは独立の施設ではなく、小学校の校舎の一部を利用した簡易図書館(自由図書館)であった。二五坪前後の閲覧室、八坪程度の書庫、二坪程度の事務室からなっており、蔵書は三千冊から五千冊であった(12)。清水が通っていた千代田小学校に両国図書館が併設されたのは、清水が入学した一九一四年のことである。清水は大人たちに混じって、連日のように両国図書館に入り浸つた。そこは清水にとっての一種の聖地であった。

三時に開館、九時に閉館といふ規定であつた。建物は、私が毎日通つてゐる、もうすつかり飽きてゐる学校の校舎であるが、夜になると、この校舎が新しい生命を帯びて来る。薄暗い廊下、電灯に照らされた教室、冷たく湿つた三和土の階段、これ等のものは昼間とは全く別の秘密めいた空気に包まれて来る。夜になると、子供の数は何処にも見えず、横山町や馬喰町辺りの商家の番頭、それから受験生など、要するに、当時の私からすれば、大人たちばかりであり、こつそりとその間に入つてゐること自身が、私にとつて既に何物かであつたに違いない。(13)

清水は日本橋から本所へ引っ越した後も、両国図書館に通い続け、その習慣は大学へ入学するまで続いた。それは清水が場末(本所)を嫌つていつの日か再び下町(日本橋)に戻りたいと考えたからではない。実際、清水は二度と下町に住むことはなかつた。両国図書館は、

空間的には下町にあったけれども、その内部はインテリの住む世界、すなわち山の手につながっていた。清水は場末から下町への回帰ではなく、場末から山の手への飛躍ないし脱出を志向していたのである。

一九二〇年三月、千代田小学校を卒業した清水は、妹の小学校の担任の教師の勧めに従って、一旦は神田にある東京商工学校（順天中学校の校舎を借用して授業を行っていた夜間の商業学校）に入学したが、通い始めてすぐにそのレベルの低さに失望し、退学届けを出す。すでに中学への進学の手続きは終了していたので、秋から半年間、日本橋高等小学校へ通った後、翌春、目白台にある独逸学協会学校中学へ進学する。そこは医者の子弟が多く通う中学として知られていた。彼は商人ではなく、医者を志したのである。この人生の転機（方向転換）にはある易者の助言が働いている。

大正九年に入ってからのある日、何の用事があったのか、私は、本所の或る洋服屋の店先に腰かけていた。易者は、大きな天眼鏡を袋に入れながら、「医者になりなさい」と私に言った。その店へ私が行った時、彼は先に来ていた。なぜか私に興味を持って、天眼鏡を取り立て、私の顔をつくづく眺めた末、彼はそう言った。「医者になれば、直ぐ博士になるし、直ぐ金持になる。」彼は、そう付け加えた。後から思えば、大部分の医者は学位があり、金持であるから、これは、私と限らず、誰にでも当て嵌まる言葉なのであったが、あの時は、そうも思わず、私だけが選ばれているような気がした。そうだ、医者になろう、と私は決心した。（14）

医者という職業は当時もいまも高い社会階層と結びついており、学業優秀な子どもが「大きくなったら何になる？」と質問されたときの定番の回答であり、なぜ清水が医者を志したのかを深く詮索する必要はないと思うが、一つだけ指摘しておきたいことは、清水が小学校の二年生だった一九一五年、世界的な医学者となっていた野口英世が十五年振りに帰国し、日本中に野口英世フィーバーが起こったことである。

野口英世は一八七六年に福島県猪苗代湖畔の翁島村で生まれ、一九二八年にイギリス領西アフリカ（現在のガーナ）の首都アクラで死んだ。彼の立身出世物語は次のように要約することができる。「野口英世は貧しい農家に生まれ、幼いとき、左手に大火傷をしたが、不断の努力により、世界的な医学者になった。」努力（勤勉）と上昇（立身出世）がこの物語の二大要素であり、出身階層の低さ（貧農）、身体的ハンディキャップ（左手の大火傷）、職業

的使命感に殉じた最期(黄熱病で死亡)といった付加的要素がこの二大要素を際立たせるための格好の条件となっている。野口の最初の伝記は彼の生前一九二一年に出版された渡辺善助著『発見王野口英世』で、以来、百を優に越える伝記が刊行され、日本全国の書店にはいまでも彼の伝記が並んでいる。「野口英世」伝は近代日本における「人生の物語」の聖典ともいべきものである。

清水が野口英世のような医者になろうと思っていたかどうかは定かではない。しかし、独逸学協会学校中学の入学試験に合格した清水は、間違いなく、努力と上昇を二大要素とする立身出世物語を生きようとしていた。中学三年生のときに経験した関東大震災は、清水にとって大きな出来事であり、それは清水が医者へのコースから離れる契機となったけれども、進路の変更は必ずしも立身出世物語からの離脱ではなかった。社会学を勉強することは、社会学者になることであり、社会学者になることは大学教授になることであった。「立身出世の学問的形態」 - 清水は自伝の中でそう言っている。

4 . 人生問題

少年清水が立身出世の物語を生き始めようとしていた時期は、皮肉なことに、日本の社会全体を視野に入れてみると、立身出世の物語にある驕りが見え始めた時期であった。

社会の近代化(工業化、都市化)に伴って生まれたのは社会問題(貧困問題)だけではなかった。個人の平面における人生問題の誕生も注目すべき出来事である。人生問題とは「いかに生きるべきか」という問題である。「いかに生きるべきか」ということが問題になりえるのは、第一に、「生き方」の選択肢が存在すること(選択肢が存在しなければ選択の問題は生じない)第二に、ある「生き方」を選択したからといって必ずしもそれを実現できるとは限らないこと(社会的資源の多寡や個人の能力の有無のために)第三に、同じ問題で悩む人々が一定数存在すること(そのとき初めて人生問題は個人の水準を超えて時代の問題になる)といったことが背景になければならない。日本においてそうした条件が整い、人々、とくに若い人々の間で、人生問題の流行が起こるのは明治三十年代に入ってからである。一高の秀才、藤村操は哲学的な理由が原因で自殺した最初の日本人ということになっている。一九〇三年、華厳の滝から投身自殺をするにあたって、彼が書いた遺書は有名である。「万有の真相は唯一言にして悉す曰く「不可解」。我この恨を懐て煩悶終に死を決するに至る」。当時、一高で藤村と同学だった岩波茂雄は、一九四二年に大東亜会館で催した「回顧三十年

感謝晩餐会」の挨拶の中で次のように語った。「私の一高時代は、所謂人生問題が青年の最大関心事で、俗に煩悶時代と云われた頃でありまして、畏友藤村操君の死が、私共青年に与えた衝撃は、実に大なるものがありました。…(中略)…名を後世に掲げるといような、それまでの立身出世主義の人生観は魅力を失い、寧ろこれを蔑視するようになりましたが、同時に勉学の目的をも見失って、一時私は学業さえ放擲したのであります。」(15)

立身出世主義は「いかに生きるべきか」に関する近代日本の公式見解であった。しかし明治三十年代後半の青年たちの一部はそうした生き方に懐疑のまなざしを向けるようになっていた。彼らの多くは学歴的にはエリートで、しかし、理系ではなく、文系の中でも法律や政治といった社会と密接に結びついた学問ではなく、哲学や文学といった実社会とは距離を置いた学問に向かう傾向があった。立身出世主義への反感がそうしたコースを選ばせたのか、立身出世のメインストリートから落ちこぼれてしまった挫折感が立身出世主義への嫌悪を強めたのか、おそらくは相乗効果ではないかと思うが、「世の中の役に立たない」場所にいると、自身の存在価値に対して敏感になり、人生問題に悩むということも一つの能力であるから、煩悶青年は煩悶することに自身の人間としての優等性を感じていたのであろう。どんなことで悩むかにも優劣があるのである。人生問題で悩むことは自分が人生問題で悩む(ことのできる)人間であるという自己提示であったのである。人生問題に悩む人々がある一定数を越えると、人生問題は一種の商品としての価値をもってくる。夏目漱石『こゝろ』、阿部次郎『三太郎の日記』、倉田百三『愛と認識との出発』などには、そうした人生問題関連商品としての側面が多分にあった。

学業を放擲し一高を除籍になった岩波は、一年後、一九〇五年に東大哲学科選科に入学し、一九〇八年に卒業、神田高等女学校に職を得たが、学校の経営方針および教師という職業に飽きたらず、一九一三年、退職して神保町に岩波書店を開業した。当初は新本・古本兼業の本屋であったが、翌年、漱石の『こゝろ』を出版、さらに漱石没後の一九一七年、絶筆『明暗』を出版、年末には漱石全集(第一次全十二巻)の刊行を開始した。漱石の知遇を得て(岩波と漱石門下の安倍能成や阿部次郎は一高時代の同級であった)、岩波書店はたちまちのうちに一流の書店となった。『三太郎の日記』も『愛と認識との出発』も岩波書店から出た本である。岩波書店の繁栄は人生問題に煩悶する青年たちの増加と連動している。

清水は『本はどう読むか』の中で、中学卒業時に四年間級長を務めたことに対する慰労品としてもらった『合本 三太郎の日記』が自分の興味をまったく引かなかったというエピソードを語っている。

『合本 三太郎の日記』を読んだ時期が悪かったというのは、大部分、私が自分の職業を決定した後であったためである。なぜなら、若い人間にとっては、自分の職業が決定されると同時に、人生の問題は解決されてしまうからである。もちろん、それで問題の全部が完全に解決されるということはないけれども、その大部分は解決されてしまう。...(中略)...世の中には、一生を通じて、深刻な面持ちで人生の諸問題を論じている人間が何人かいるけれども、この人たちは、そういう問題で本当に苦しんでいるのではなく、それを論じるのが、彼らの「職業」なのである。それを論じることによって収入を得て、それで家庭を支えているのである。そういう人たちのペースに巻き込まれてはいけない。(16)

『合本 三太郎の日記』に興味を覚えなかった清水だが、やがて自分がその出版社から出ている雑誌『思想』で論壇にデビューすることになるとはこのときはまだ思ってもいなかっただろう。現在まで続いている雑誌『思想』の前身である『思潮』が創刊されたのは、大正六年五月、そのときの編集長は阿部次郎であった。

明治三十年代に高学歴の青年たちの間で起こった人生問題ブームは、やがて非高学歴の青年たちや、青年ではない人々(成人男女や少年少女)の間にも、浸透していった。人生問題が広く世間一般の人々の間に浸透していったルートの一つは、明治四十年代に台頭してきた自然主義の小説である。

田山花袋『蒲団』(一九〇七)の冒頭で、主人公の竹中時雄(=花袋)が直面している人生問題が語られる。「今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚の快樂などはとうに覚め尽くした頃であった。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作(ライフワーク)に力を尽くす勇氣もなく、日常の生活 - 朝起きて、出勤して、午後四時に帰って来て、同じように細君の顔を見て、飯を食って眠るという単調なる生活につくづく倦き果てて了った。家を引越歩いても面白くない、友人と語り合っても面白くない、外国小説を読み涉獵しても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などという自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような気がして、身を置くに処が無いほど淋しかった。道を歩いて常に若い美しい女、出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思った。三十四五、實際この頃は誰にでもある煩悶で、この年頃に賤しい女に戯るるものが多いのも、畢竟その淋しさを医す為めである。世間に妻を離縁するものもこの年頃に多い。」(17)

ここに描写されている主人公の心理は、現代社会における「中年の危機」そのものである。三十代半ばを「中年」と呼ぶには早過ぎると思うかもしれないが、当時と今の標準的な人生の長さの違いを考慮するならば、当時の三十代半ばはすでに「中年」である。竹中時雄の煩悶は藤村操の煩悶と比べればあまりに通俗的である。『蒲団』の功績、一般に自然主義の小説の功績の一つは、凡庸な人生問題を赤裸々に述べることでそれに市民権を与えたことである。普通の人生の普通の悩みではあっても、それは語るに価する悩みであることを、自然主義の小説は示したのである。すなわち人生問題の大衆化である。

近代的自我の構造的特徴が外面（公的自己）と内面（私的自己）の二重構造にあるとすれば、そうした二重構造は内面を語ることを通して形成される。内面を語るとは、具体的には、他人に言えない悩みや秘密を語るということである。逆に言えば、近代的自我を持つためには悩みや秘密がなくてはならないのである。

読売新聞の紙面に「身の上相談」が設けられたのは一九一四年五月二日のことである。以後、日中戦争から敗戦直後までの期間を除いて、「身の上相談」は現在まで続いている（現在の名称は「人生案内」）。一般の読者が個人的な悩み事、すなわち人生問題を投稿し、回答者が紙面でそれに答えるという「身の上相談」は、言ってみれば、田山花袋が『蒲団』で確立した「告白」という制度の庶民版である。文学青年たちが私小説という形式を使って行おうとしたことを、庶民は新聞の「身の上相談」において行おうとしたのである。当時の相談内容には、たとえば「夫が一日にミカンを二十個も食べるが、何か衛生上悪いことはないでしょうか」というような、われわれから見ても「これが人生問題といえるだろうか」と思えるものが混じっている。反対に、たとえば「毎日毎日閑散な日を過ごすのは、何だか自然の道に背くような気がして、罰があたりはせぬかと良心に恥ずることもあります」という三十四歳の主婦からの相談のように「専業主婦の憂鬱」としてわれわれにはお馴染みのものが、「これはまた珍しいお尋ねですね」と回答者によって新種の人生問題として扱われていることもあった。（18）

端的に言えば、「身の上相談」は個人的問題が人生問題として社会的に承認される場所であった。相談者はただ単に自分が困っている問題を相談するのではなく、「身の上相談」が取り上げてくれるであろう問題を相談する。新聞社は相談をランダムに採用するのではなく、「身の上相談」で取り上げるに相応しい問題を採用する。回答者は個々の相談への回答がその場限りの特殊のものではなく、同種の相談に対して繰り返し適用可能な一般性のある回答をする。読者は相談者と回答者のやりとりを対岸の火事を見物するように読むのではなく

(そういう面もあるが、それだけでなく) 自身の人生問題への対処の参考にしようとして読む。こうした相談者、新聞社、回答者、読者の協同作業の産物として、その時代、その社会における人生問題が構築されていく。ちなみに読売新聞が「身の上相談」を始めるよりも十二日早く、ライバルの東京朝日新聞では夏目漱石の『こころ』の連載が始まっている。人生問題への高まりが時代の趨勢であったことを物語る符号の一致といえよう。

少年清水が自身の人生問題 = 進路問題について易者からアドバイスを受けていたことはすでに述べたが、当時、彼には誰にも相談できない深刻なもう一つの人生問題があった。それは二冊目の自伝『私の心の遍歴』で語られている出来事である。小学校三年生のとき清水は両親の元を離れて、隣家の医者家族と一緒に彼らが経営する福島県横向温泉の旅館に二週間ほど滞在した。当初、憧れの避暑ということで、わくわくした気持ちで出かけたのであるが、現地について身の置き所のないことに気づく。

宿に着いて、いろいろの事情が判つて来るにつれて、私は自分の立場がないことに気がつきました。この宿にいる人間は、滞在客か、医者家族か、その使用人か、この三種類なのですが、私だけはそのどれにも入らないのです。…(中略)…私は、一体、何者なのでしょう。私は、どこにいても邪魔なような気がして来ました。(19)

他人の眼から見れば、これは誠に小さな事件です。けれども、九歳の私にとっては、実に大きな事件でした。これは、後に関東大震災に遭ったり、徴用員としてビルマへ連れて行かれたりしたのに劣らぬ大事件でした。…(中略)…この大事件のために、私は一層臆病になつてしまったようです。ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どうということになるか、それを身にしみて感じたのでしょう。とにかく、すっかり臆病になりました。…(中略)…今でも、時々、横向温泉の夢を見ます。(20)

『私の心の遍歴』は、『婦人公論』に連載され、連載終了後に単行本として出版されたのだが、横向温泉での出来事が語られたのは連載の五回目、一九五四年五月号であった。それはちょうど石川県内灘村の米軍試射場反対闘争の運動方針をめぐって、清水が左派社会党を批判し(『中央公論』一九五四年一月号の「わが愛する左派社会党について」)、左派社会党がそれに激しく反論する(『中央公論』二月号の「清水幾太郎氏の愛情にこたえて」)という「内部闘争」が繰り広げられた直後のことであった。一九四八年の暮れから始まった平和問

題談話会(清水はその中心的メンバーだった)という大学教員たちの言論的平和運動(全面講和論の提唱)が一段落した後、運動の前線にボツンと取り残されたような格好になっていた清水に、米軍基地反対闘争への協力を求めてきたのが左派社会党=総評であった。当初、清水は一種の広告塔の役割を精力的に演じていたが、しだいに運動方針への不満(左派社会党は本気で米軍基地反対を唱えているわけではなく、選挙で勝つための材料としているにすぎないのではないか)が高じた末の破局であった。清水は「ウカウカと見知らぬ世界へ踏み込んだら、どういうことになるか、それを身にしみて感じた」はずである。その思いが、小学三年生のときの出来事をトラウマチックなものとして回想させたのであろう。集団の中で居場所のない経験、孤独の経験(そうしたことへの過敏さ)は、清水の思想遍歴を考える上での重要なポイントである。(21)

注

清水の著作からの引用は、それが『清水幾太郎著作集』全十九巻(講談社、一九九二~九三)に収められている場合、著作集から引用した。

(1)「ふるさとの人々」、一九五一、『著作集』十九巻、一八八頁。

(2)『現代思想』、一九六六、『著作集』十二巻、二九七頁。

(3)同右、十一~十二頁

(4)『わが人生の断片』、一九七五、『著作集』十四巻、一四六頁。

(5)『私の心の遍歴』、一九五六、『著作集』十巻、二四五頁。

(6)『わが人生の断片』、一九七五、『著作集』十四巻、一四五頁。

(7)清水の三冊の自伝における記述の異同の問題は、大久保孝治「自伝の変容 清水幾太郎における三冊の自伝」、一九九七、『社会学年誌』三十八号を参照されたい。

(8)木村義雄『将棋一代』、一九七四、講談社、九頁。

(9)山口孤剣『東都新繁昌記』、一九一八(=一九九二)、大空社、一二二頁。

(10)『私の心の遍歴』、一九五六、『著作集』十巻、二三八頁。

(11)同右、二五八頁。

(12)佐藤政孝『東京の図書館百年の歩み』、一九九六、泰流社。

(13)『私の読書と人生』、一九四九、『著作集』六巻、三七三頁。

(14)『わが人生の断片』、一九七五、『著作集』十四巻、一四六頁。

(15)岩波茂雄『岩波茂雄遺文抄』、一九九八、日本図書センター、六十五~六十六頁。

(16) 『本はどう読むか』、一九七二、講談社、四六～四七頁。

(17) 田山花袋 『蒲団・重右衛門の最後』(新潮文庫版、一九七〇)、十一～十二頁。

(18) カタログハウス編 『大正時代の人生相談』、二〇〇二、ちくま文庫。

(19) 『私の心の遍歴』、一九五六、『著作集』十巻、二八一～二八二頁。

(20) 同右、二八三～二八四頁。

(21) この問題については、大久保孝治「清水幾太郎の内灘」、二〇〇四、『社会学年誌』四十五号を参照されたい。

〔付記〕

本論文は、2006 - 2007 年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)「清水幾太郎と彼らの時代」(課題番号 18530411)による研究成果の一部であり、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第54輯第一分冊(2009年3月)に掲載された。